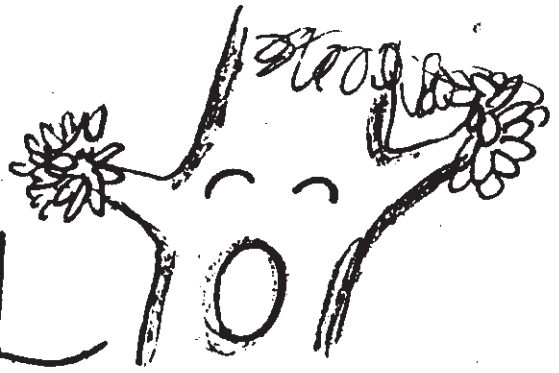




第38号



ECOMAIL

関西 ECOMAIL

関西支部会員みなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員みなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

日本環境教育学会第8回大会(横浜)迫る!

会期 1997年5月24日(土)~5月25日(日)

会場 横浜国立大学 教育学部講義棟8号館・教育文化ホール

大会事務局 〒240 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

☎FAX045-339-3408(遠山)3414(持田)

5月24日(土)

9:00~受付 教育学部講義棟8号館

10:00~15:00 一般講演(ミニシボタム・ワークショップ・体験)

(12:00~13:00 昼休憩)

15:15~16:15 記念講演 教育文化ホール

16:15~17:00 総会

17:30~19:30 懇親会 第2食堂

5月25日(日)

9:00~12:00 一般講演

13:00~17:00 ミニシボタム・ワークショップ

工藤孝浩(神奈川県水産総合研究所)

「横浜の海を教材とした環境教育」

第38号 目次

- ・第56回 関西ワークショップ(2/22)報告
「自然の中へでかけようスウェーデンで生まれた幼児期からの環境教育」
君塚雅俊(日本野外生活推進協会) …2~3
- ・第58回 関西ワークショップ(4/20)報告
自然と人との関係を考える! 「自然現象が自然災害になるとき」
一住吉川から五助橋断層を歩く」 藤岡達也(大阪府立膳山高等学校) …4~5
- ・1997年度連載企画のお知らせ 天野雅夫(広報委員) …6
- ・「すいた環境教育フェア'97」の御案内 …7
- ・ネットワーク …6~8

この関西 ECOMAIL は皆様の会費をもとにして印刷発行しております。会費を滞納されている方は速やかに納入ください。振替用紙を同封しました。お手数ですが、氏名を記入して郵便局から入金してください。なお、1994年度以前から会費を滞納されている方への発送は一時停止させていただきます。是非、会費を納入くださることを重ねてお願いします。

「自然の中へでかけよう—スウェーデンで生まれた幼児期からの環境教育—」

君塚雅俊（日本野外生活推進協会）

2月22日のワークショップで、皆様には初めて、私たちの活動を紹介させていただきました。この紙面では、当日の高見豊（日本野外生活推進協会会長）の話に添って報告いたします。名称は「日本野外生活推進協会」。堅苦しい名前ですが、これはスウェーデンの「野外生活推進協会」（以下、「協会」）からそのままいただいたものです。1992年7月に発足し、スウェーデンの「協会」の指導を受けながら活動しています。



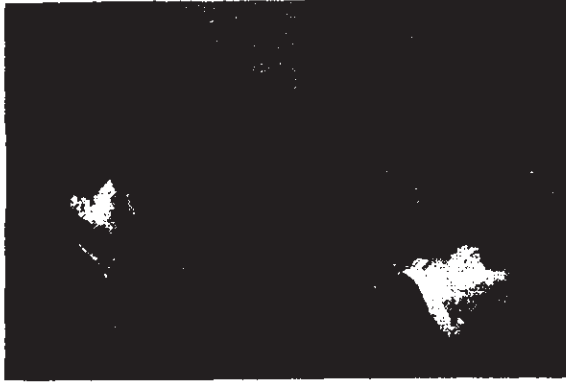
高見豊氏

スウェーデンの「協会」の歴史は古く、100年以上も前から活動を始め、現在では全国に約500の支部をおき、会員数も約20万人と、「自然保護協会」と並ぶ最大の環境団体（NGO）です。スウェーデンでの20万人といえ、日本の人口で換算すれば300万人に相当する数で、行政も政策に対する意見を求めてくるほどの影響力を持っているそうです。スウェーデンでは、原発廃止が国民投票で決められたり、すべての自治体で“アジェンダ21”に添った目標を作成し、行動に移しています。福祉だけでなく、環境問題に関してもかなり進んでいる感じがします。どうしてこのように環境重視の政策がとれるのでしょうか。その答えのひとつとして、豊かな自然体験があげられると思います。スウェーデンには、もともと、短い夏は家族でキャンプをし、厳しい冬にはスキーやスケートを楽しむという習慣がありました。そんな体験の中で、環境問題を自分の問題として、真剣に取り組む姿勢が育ってきたのだと思います。

子どもは好奇心旺盛です。自然の中に連れ出してあげれば、様々なものに興味をもちます。そして、自然に興味をもてばもつほど好きになり、やがて自然界の成り立ちを理解し、大切にしようとする心が育っていきます。そのような考えのもとに、スウェーデンの「協会」で幼児向けの自然教育プログラム「ムッレ教室」が始まったのは1956年。ヨスタ・フロム氏とステイーナ・ヨハンソン氏が創始し、やがて、保育園、幼稚園にも導入され、現在までに延べ150万人が参加するまでになりました。この「ムッレ教室」を最初に受けた子どもたちがもう40才代です。「ムッレ教室」を受けた世代が今後のスウェーデンをより良い方向に導いてくれることを期待しています。

「ムッレ」の語源は、スウェーデン語の“Mullen”（土壌）で、すべての生命の根源という意味が込められています。「ムッレ教室」では、自然を楽しみ、五感を使って様々な生物と触れ合うことによって、人間が他の生物たちと係わり合っ

きていることを学んでいきます。何回にもわたる教室の要所で架空の妖精「森のムッレ」が登場し、草花や動物の声を伝えたり、人間の自然破壊を気づかせたりするところが最大の特徴です。「ムッレ教室」は、各支部で、養成講座を受けたリーダーによって開かれています。が、「協会」が運営する保育園はもちろん、他の幼稚園・保育園でも園の活動として全面的に取り入れているところもあります。そのよ



活発に意見が交換された

うな園には、ジャングルジム、ブランコ、すべり台といった人工的な遊具は一切ありません。子どもたちは木や草花、石や土などを使って一日中屋外で遊ぶのです。自分で遊びを考え出さなければならない分、創造力がつきますし、おもちゃをいちいち片付けなくてもよいので継続的な遊びができます。

雨の日もカッパを着て外へ出ますし、高い木や岩場に登ったりもします。日

頃からこのような生活をしていると、骨折のような大けがは少なくなります。また、都会の保育園の園児に比べて集中力と運動能力がすぐれているということが、第三者の研究グループによって証明されました。

日本の「協会」でもスウェーデンにならい、5・6才向けの「ムッレ教室」を中心に、3・4才向けの「クニータナ教室」、小学校低学年向けの「ストローバレ教室」と、同高学年向けの「フリールフサレ教室」を開いています。導入する際に「ムッレ」などのキャラクターを日本風にアレンジすることも考えましたが、ぴったりのものが思い浮かばず、そのまま採用することになりました。ただ、教室の進め方については、日本に合うよう変えています。

兵庫県氷上郡市島町（福知山市の南隣）に本部をおき、支部も市島・大阪・篠山の三カ所になりました。支部主催の教室以外に兵庫・岐阜・愛知・鹿児島 of 保育園でも「ムッレ教室」が採用されています。昨年度の会員数は、個人が261人、団体（保育園など）が10団体です。各教室は養成講座を終了したリーダー（ボランティア）によって運営されています。教室を開くには、自然の循環系が揃っている広さと自然の豊かさが必要ですが、大阪、神戸などの都会でも、多少移動すれば可能なようです。

「ムッレ教室」に興味のある方は、ぜひ一度、市島へお越しください。市島では、支部主催の教室のほか、三つの保育園で通常保育の一環として頻繁に開かれていますので、実際に体験していただける機会も多いと思います。各教室、リーダー養成講座など「協会」についてのお問い合わせは下記までお願いいたします。

日本 野 外 生 活 推 進 協 会

〒669-43 兵庫県氷上郡市島町上牧691 TEL/FAX 0795-85-2639

第58回ワークショップ

自然と人との関係を考える！

「自然現象が自然災害になるとき

ー住吉川から五助橋断層を歩くー」 報告

藤岡 達也

[本日のテーマ]

あの阪神淡路大震災から2年以上もたちました。しかし、その傷跡は未だに完全には消えてはいません。今日訪れる場所は昭和13年にも大水害に見舞われました。自然はなぜ、こんなに人々を苦しめるのでしょうか。

それを考えるためにも自然のはたらきを見てみましょう。

地球の内部エネルギーによって山々は高く造られ、太陽エネルギーによって水は地表を循環し、その結果として河川は地表を平坦化します。つまり、地球の内部と外部のエネルギーがつりあって現在みられるような自然景観をつくりだしました。

六甲山も地下深部でマグマがゆっくりと冷えて固まってできた花こう岩が、この200万年ほどの間に隆起してできました。隆起するには両側から強い力を受けることが必要です。この圧縮する力を受けたとき地下の岩盤が割れると断層ができます。そして、このとき地震が発生します。

また、河川は上流の地質・岩石を侵食し、その土砂を運搬して下流に堆積することによって平野をつくります。しかし、豪雨では多量の土砂が一気に河川を流れ下ります。これが土石流となります。

このような自然の営みは、人間がこの地域に住み始める前から繰り返されてきました。つまり、地球の歴史からみると自然現象にすぎないことも人間にとっては自然災害になることも多いのです。しかも、近年、人間が自然に大きくはたらきかけたり、自然に接近すればするほど、より大きな災害が発生してきました。

今日のワークショップでは、このような自然と人間との関係を足と目で考えてみましょう。また、森林浴が楽しめたり、六甲のおいしい水が流れている場所もあります。かつては水車によって、この水を利用して日本酒もつくられていました。

(当日の配布資料より)

季節の良さから、上記の内容で久しぶりにフィールドワークが企画された。当初予定では、阪急御影駅集合であったが、なぜか会員への案内葉書では阪神御影駅集合となっていたので驚いた。さっそく事務局に問い合わせたが、ともかく葉書どおりの内容で実施せよとなった。正直なところ、阪急御影駅からでも年配の方やお子様連れの人には少しきついかもしいないと思っていたが、より遠い阪神御影駅の集合に今回の

巡検に対して一抹の不安を感じていた。ともかく参加者が出来る限り少なく、いつもの健脚な世話人メンバーだけで（雨が降ってくれればなおよい）と願っていた。しかし、願いも空しく当日は好天気恵まれ、集合場所には新聞の案内を見たという年配のご婦人たちや学会員の中でも比較的年齢の高い方、小さなお子様連れの方などふだんのワークショップよりもはるかに参加者が多く、軽いめまいを感じた。

まず、御影小学校で辰巳先生から校内のビオトープを案内していただいた。集合場所の変更によって急遽、辰巳先生の御好意で見学できることになったが、テレビでも紹介されていただけあって、参加者の関心は高かった。阪神御影駅から国道2号線の間は、震災時の家屋の倒壊が著しい地域であった。東灘区では未だに復興されない住宅地が見られる。しかし、今や新築住宅街と化しており、この地域の財力をみた。

昭和13年の阪神大水害では370名の人が犠牲になり、被害家屋は22万戸に達した。そのとき流れた花こう岩の記念碑やその後作られた住吉川沿いの砂防ダムに当時の状況と現在の対策について考えることが多かった。地下深部で古い堆積岩が貫入した花こう岩のため熱変成を受けたホルンフェルスや現在も続く六甲の隆起運動などに自然の巨大な力を感じ、また、谷あいの水車小屋の跡を見ながら、やや本格的な登山道を歩く。

ようやく五助ダムに到着し、昼食をとる。しかし、不思議に思ったのは、以前は、このコースでは必ず出会った猪に今日は全く遭遇しない。このことが話題になったとき、数カ月前、芦屋市が住民には無断で猪8頭を射殺し、その肉を売っていたと聞いた。このことに対して怒りを感じている地元の人もいるので、そのことはまた、後日改めてこのエコメールで取り上げてもらいたい。

その後、五助橋断層の見学グループと六甲の水採取・森林浴グループの2つに別れて別行動をとる。この断層見学は、山の中や溪流、崩壊堆積物などを通らねばならず、若干の危険性も感じたので実施するかどうかが少し思案した。しかし、せっかくの機会だからとの希望者もあったので有志を募ったところ11名もこのコースに参加があった。石や木材などで川の中に橋や足場をつくり少しの探検気分を味わいながら、目標地点に到達した。地震発生当初は、この断層が原因だと言われていた。ここでは、断層破砕帯の粘土、断層の両側で違う地質や逆断層の状況がよく観察でき、断層を直接みたのは始めてという人も大部分が占め、苦勞してここまでたどりついた甲斐はあったとも言える。他にも報告すべきは豊富にあるが紙面の都合上ここまでとしたい。

ともかく、何とか無事に巡検は終了した。これは辰巳先生の車に何名か乗せていただいたこと、天野氏が断層までの道を切り開いてくれたこと、何よりも巡検参加者の忍耐につきると言える。初めて関西支部のワークショップに参加された方もこれに懲りず、また参加されることを願っている。

1997年度連載企画のお知らせ

天野 雅夫（広報委員）

関西エコーメールでは昨年度、連載企画「阪神・淡路発！被災地は今」を掲載してきました。震災以後、2年と3ヶ月余りの歳月が経ち交通機関や道路、港湾施設、公共施設等はほぼ復旧し、表通りに面した建物は随分と建て替えられました。しかし、全半壊した家屋のすべてが取り壊されたわけではありませんし、裏通りを一步歩み込めば、まだまだたくさんの空き地が残っていることに気が付きます。さらに、小・中学校、高校のグラウンドや公園には今でも整然と仮設住宅が建ち並び、そこでは、まだまだ大勢の人々が過酷な生活を強いられているというのが現状です。

連載では、県や市の職員、研究者、教育関係者、ボランティアリーダー等の方々から震災のその後の様子を書いて頂きました。報告にある通り、被災地では数多くの問題が山積し、その中には解決の糸口すら見いだせない問題や、解決のために莫大な労力を必要とする問題が残っています。しかしながら、こうした状況の中で市民は「人間と環境」「自然との共生」「くらしと地域の繋がり」「教育の原点としての環境教育」ということを学びつつあるのも確かな事実です。震災を体験した子どもたちは、自然と人間との関係について深く印象付けられたでしょうし、一般市民であっても、自然破壊が自然災害をまねき、自分たちが生態系という循環する「命の環」の中に存在する一つの構成要素であるということに気が付きつつあるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、お忙しい中で原稿を書いて下さった日本環境教育学会関西支部会員、世話人の皆様に深くお礼を申し上げます。次回は「阪神・淡路発！被災地は今」の最終回を掲載すると同時に、新連載企画「開催せまる！COP3京都会議」（仮題）を開始する予定です。今後ともよろしく願いいたします。なおご意見、ご感想、環境教育情報等ございましたら、日本環境教育学会関西支部事務局（P8参照）広報委員会までお寄せ下さい。

「インターネットでタンポポ調査」のお知らせ

997年4月1日～5月31日の期間、宝塚市、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、川西市、三田市、三木市、明石市、神戸市、猪名川町、吉川町、稲美町を調査範囲として行われています。

主催 宝塚市立教育総合センター、共催 宝塚市環境管理課

協力 野生生物を調査研究する会、園田学園女子大学情報教育センター

タンポポ調査のインターネットURL

<http://www02.city.takarazuka.hyogo.jp/terc/online/tanpopo/>

インターネットに接続されていない方の問い合わせ先

〒665 宝塚市小浜1-2-1 宝塚市立教育総合センター タンポポ調査係宛

☎0797-84-0946 FAX0797-85-2281

ネットワーク

「すいた環境教育フェア'97」の概要

吹田市では昨年に引き続き「すいた環境教育フェア'97 ～みんなで考えよう 環境ってなあーに～」を以下の要領で開催いたします。たくさんの方々の御来場をお待ちしております。

日 時：6月14日(土) 10:00～16:00

会 場：メイシアター（吹田市文化会館）

内 容：講演会、分科会・講座、環境取り組みの発表、各種展示、
参加型環境分析、リサイクル実演、体験コーナー、
エコツアー、演奏など。

一 対 象：子ども、大人、会社等どなたでも参加できます。

主 催：すいた環境教育フェア'97実行委員会

後 援：日本環境教育学会、大阪府、大阪府教育委員会、大阪21世紀協会、
環境庁（予定）

協 力：日本環境教育学会関西支部

問合せ：すいた環境教育フェア'97実行委員会事務局

吹田市生活環境部公害対策課計画係 TEL.06-384-1231（内線2632）

※関西支部では分科会「都市環境におけるビオトープ」（10:00～12:30）を後援します。

なつとわーく

長谷川有機子 さん 「イヤーゲーム 心の耳を育てる 音からの環境教育」を出版
紹介をかねて、冒頭「なぜ、イヤーゲームがいま必要なのか？」から引用

「聴覚は、わたしたちが外の世界を知るために五感の中でもっとも早く、すでにお母さんのお腹の中から働かせている器官です。（略）近代化が進んで、自動車の走行音や建設工事、冷暖房の機械の音などが、昼夜を問わず響き渡るようになりました。その騒音から自分を守るため、わたしたちは成長とともに無意識のうちに聴覚の働きを鈍らせていくようになってしまいました。そして次第に聴覚の働きを発揮させないことが習性となって、周囲の音に耳を澄ます感覚や能力が衰えてきたのです。」

本書には37のイヤーゲームが掲載されており、「おわりに」の中の長谷川さんの言葉のとおり、「心の耳を育てる」という長谷川さんの願いが表れた書物です。一度、読んでみてください。

問い合わせ：スタジオ・マイ・ペース 〒605 京都市東山区清水4丁目172-1 ☎075-541-1425

レイチェル・カーソン生誕90年 記念の集会

化学物質による自然の破壊と生命への危険を警告した「沈黙の春」の著者レイチェル・カーソン(1907-1964)。ことしは彼女の生誕90年にあたる。地球規模での環境問題がますます深刻化しつつあるいま、あらためて彼女の生涯と思想に学ぶことがもとめられている。

京都のつどい

とき 5月10日(土) 午後1時30分開会 (今週です)

ところ せいきょう会館(地下鉄まるたまち下車、南口3分)

報告 ・レイチェル・カーソン生誕80年から10年たって

(レイチェル・カーソン日本協会会報編集長 原 強)

・わたしと「センス・オブ・ワンダー」

(保育園保母 茅谷千恵子)

講演 レイチェル・カーソンと現代

(大阪教育大学教授 鈴木 善次)

参加費 500円

問い合わせは☎075-251-1001

日本集会

とき 5月27日(火) 午後1時15分開会 午後4時30分終了予定

ところ ドーンセンター地下鉄谷町線天満橋下車東へ

基調報告 カーソンの思想を現代にいかすー生誕90年によせてー

(レイチェル・カーソン日本協会会報編集長 原 強)

シンポジウム エコロジー・遺伝子・温暖化… 生命危機の時代と私たちの暮らし

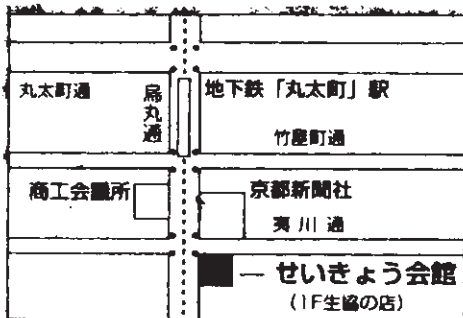
カーソンの思想を語り継ぐ

コーディネーター: 末石富太郎

パネラー: 綿貫礼子、浅岡美恵、若山茂樹、井上善雄、稲葉紀久雄

資料代 500円

問い合わせは☎06-941-3745



関西ECONAIL

第38号 1997年5月7日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

☎582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (☎&FAX 0729-78-3381 [直通])

第39号は 1997年6月30日発行予定 原稿必着期限6月20日